

<派遣報告書>

報告者 大村谷 菜々

1. 大会名 第56回 全九州高等学校バスケットボール春季選手権大会
2. 期間 令和8年2月13日(金) ~ 15日(日)
3. 会場 男子：菊陽町総合体育館、第二高校体育館
女子：合志市総合センターヴィーブル、大津高校体育館
4. 派遣者 隈元ゆみこ 三木大助 角田杏子 藤田学 石谷祐貴 大村谷菜々
以上6名
5. 担当試合
 - ① 2月14日 第1試合 佐賀北(佐賀) - 長崎女子(長崎)
 - ② 2月14日 第5試合 鳳凰(鹿児島) - 延岡学園(宮崎)
 - ③ 2月15日 第1試合 福大若葉(福岡) - 長崎西(長崎)
6. GAME
 - ① 佐賀北(佐賀) - 長崎女子(長崎)

CC：角田杏子(鹿児島) U1：鍋島光博(熊本) U2：大村谷

・PGC

チーム情報：両チームに長身選手在籍、インサイドプレーの可能性あり
→Lのローテーションを必要に応じて積極的に行う意識
メカニクスの確認(エッジの見方、プレス時のCの対応)
ベンチコントロール：コミュニケーションを求められた際は無視せず簡潔に対応

・内容

PGCでも共有したローテーションの意識と、影響の有無を見極めてファウルコールをすることを意識してゲームに臨んだ。

L時にインサイドでマッチアップがあるときは積極的にローテーションを行い、メカが重くならないようトライすることはできた。しかしキックアウトや予想と逆の方向にプレーが展開して振られてしまう場面と、ローテーションすべきだったと双方が思っていたのに渡れなかった場面がやはりあるため、場面やゲームの流れをもっと分析し、タイミングをよく吟味していく必要があると感じた。

またオープニングゲームということもあり、toughにプレーをさせたい気持ちと細かくてもイリーガルでゲームに必要な笛は入れていきたいと思いつつコールを続けたが、HCからファウルについてコミュニケーションを求められる場面があった。ゲーム後に福岡先生から講評をいただき、インパクトに反応する場面が多く、前後のファウルとの関係性が曖昧になりちぐはぐ感が出てしまうとコメントを

いただいた。映像で確認し、確かに現場ではファウルと感じ取り上げたが、もう少し影響まで見て分析していればプレーは継続でき、ノーコールでもよかったと思った場面があった。

プライマリで起こったファウルについて、現象と影響の関係性をもっと細かく分析し、自分がコールしたものやクルーがコールしたものの違い/共通点まで考えて一貫性のあるレフェリングができるよう意識しなければならないと感じた。

② 鳳凰（鹿児島） - 延岡学園（宮崎）

CC：紀伊孝哉（佐賀） U1：峰聰（長崎） U2：大村谷

・PGC

チーム情報：留学生への対応、特にインサイドプレー時は注視する

→ 前試合で特徴のある選手を共有（イリーガルスクリン等）

メカニクスの確認、ベンチコントロールについて

・内容

留学生がいるため、1試合目同様L時にはペイント内で起こるポジション争い、リバウンドやオフボール時の手の絡み、イリーガルな体の使い方が双方にないかプライマリを集中してレフェリングすることを意識してゲームに臨んだ。

1試合を通して、自分のプライマリや目の前では比較的大きなアクション（後ろから押す→倒れる、ヘルプディフェンダーの遅れなど）を伴うファウルが多く、そういった場面では取り逃しなく笛を入れることができた。しかし留学生が絡む部分（特にオフボール）の対応や、toughとroughの瀬戸際のような場面ではクルーのお二人の力を借りてしまう場面もあった。特に鳳凰のオールコートDFのときの体や手の使い方に関して、あっさりと笛を入れて前半で整理していただいたと感じた。toughなゲームにしたいものの、見すぎて流してしまうというのが往々にしてあるので、テンポセットというものを再度よく考え、どんなゲームにしたいか、このゲームではどのようなものに笛が入るのか伝わるようにしていきたい。そのためにも前試合での課題であった「現象の分析」を今後一層こだわってやっていく必要があると感じた。

③ 福大若葉（福岡） - 長崎西（長崎）

CC：大村谷 U1：松浦由依（宮崎） U2：平本好美（熊本）

・PGC

チーム情報：前日の試合から両チームのプレースタイルを共有

→ オフボール、リバウンド時の出来事を把握する

基本的なメカニクス、プライマリの確認

エッジの確認（Lは何を見ているか体の向きで明確に示しましょうの意識）

・内容

Bパート1日目に平本さんが両チームとも担当されており、キーマンやプレースタイルをクルーでよく共有してゲームに入ることができた。双方留学生は在籍していないものの、サイズのある選手がリング下でリバウンドをよく頑張るのでLはそこで何か起こる可能性があることを頭において、またT、CはLがビジーな時は外回りをきちんとカバーしようと共有した。

ゲームを通して、ポジションアジャストに課題が感じられた。ハーフコートをよく走り回り、カットインの連続でDFを崩して得点を狙う長崎西のプレースタイルに対して、ドライブやミドルショットの際にTはあと1歩ズレを作れば見えるポジションだったかもしれないと感じる場面があった。広く見ようとするあまりTの位置が高くなりすぎており、ドライブ→ショットとなった時に現象をとらえにくいポジションになってしまっているため、間接視野やTのレベルの上げ下げをうまく使いながらポジションアジャストを追求していきたい。福大若葉のキックアウト→3Pショットに対しては先に述べた体の向きや視線で意思表示を行い、クルーで協力して視野を分担することができた。しかしインサイドにボールが入った際にクローズドアングルになってしまっているケースがあったのでこちらもポジションアジャストに気をつけていきたい。

また、ケガでゲームを止めた際の処置と再開方法や、自分以外のクルーで判定が割れてしまった時の関わり方など、CCMの部分にもまだまだ課題が残ると痛感した。処置を行う際の立ち振る舞いや再開時の声の使い方、EOGの表情など様々な工夫でゲームを締めることができると学ばせていただいたので必ず今後に活かしていきたい。

7. 所感

九州大会のAパートを初めて担当させていただき、他大会とのレベルや雰囲気の違いなどを感じながらも、クルーの皆様のおかげで最後まで頑張らせていただくことができました。日頃課題と感じてトライしていることが効いていると感じる部分も少しありましたが、まだまだ効果を感じられずにいるものも多くありました。トライすることの質や方向性を今一度見直すために、今大会の3試合を活かしていきます。

またCCとしてもコートに立たせていただき、ゲームコントロールやアクシデント時の対応について大変勉強させていただきました。判定はもちろんですが、それ以外にもCCMを持って関わることでゲームを良くするためにできることがあると改めて感じました。細やかな気遣いや気付きがここにつながると思いますので、私生活でも

意識していきたいと思います。

最後に、派遣をご快諾いただきました原田審判委員長をはじめとする鹿児島県バスケットボール協会の皆様、大会の運営にご尽力いただきました熊本県バスケットボール協会の皆様、今大会に関係されるすべての方々に感謝申し上げます。

以上、ご報告と致します。